

喜内、何の氣も付かず、同じ屋敷奉公ならば、先君判官鹽谷のお傍仕へもさせんず物、お家は没落。我は長病にて行歩叶はず、悴重太郎、何國に吟ひ居事やら、まだしも老の樂しみは、孫の太市。瘡も山上仕廻たれば、大役濟だ、出かしたな、見やれ賢い目元でないか、追侍の子迎、瘡瘡の中でも、浦島やお山人形のぬかつた物は、大嫌ひ、公平の人形の顔の赤いは、出物の藥、適功の兵に成兼ぬ利口者と、子々も孫に余念なきヲ、かはいそふに、したが今年は並がよいげな、よい時美しい事仕やつたの、ほんにマアおりゑ様、此様な瘡瘡子の有のに、毎晩々々よう日參なさんすのふ、又かいな、そんな事、わしや聞たうないと、ひやく思ふ嫂に言損ひの機嫌取、ドレほん抱てやりましょか、伯母が著物もあつかじやぞや、サア赤いはよいが、玄とのないのにこまつたと、瘡瘡の禁句、くろめ兼、せひも納戸へ連て入、

〔續視聽草 初集 二〕瘡瘡善惡輕重兒相

一 顔色至て白小兒は重し

是は血枯る色なり、肉太くとも正血にあらず、脱血也、これは水泡とて出るは安く、本膿結痴むづかしく油斷せば危し、常に消毒の藥を用べし、

一 同色黒き小兒重し

是は血死色、瘡瘡出兼べし、火疱とて小粒なり、皮ぞこに針をうへし如くにて、熱烈く、甚惡症也、常に解毒すべし、略○中

一 同青き色の小兒重し

是は血締る色なり、山を上ゲ兼る内へ引形也、危し、常に病有小兒也、驚風虫等の用心すべし、

一 同赤黒色又重し

黒き色同斷にて是も危し